

アルルの寝室

1888年10月、南仏の地アルルで、ゴッホはゴーギャンの到着を待っていた。明るい太陽の陽射しにあふれたこの地で、才能ある芸術家として敬愛するゴーギャンと切磋琢磨しながら共同生活をする夢がもうすぐ実現する。「黄色の家」の作品として残るゴッホが借りた家は、ラ・マルティエヌ広場に面した二階建ての家。その二階にゴッホの寝室とゴーギャンの寝室が隣り合わせていた。

ゴッホは新しい生活への期待に促されるように、自分の寝室を描くことにし、「睡眠と休息を表現しようとした」と、弟テオとゴーギャンに宛て、スケッチを添えて作品の概要を知らせる。アルルに先立つパリ時代に獲得した印象派の明るい色彩と、平面独自の可能性を追求する浮世絵の手法が作品に活かされることになった。「構想はこの通り単純なものだ。影や投影される部分は取り除いて、日本の版画のように平たいざざざりした色面になっている」とテオへの手紙で表現する。こうして、しっかりした透視図法に裏打ちされた画面が心地のいい奥行きのある空間を表現し、ゴッホを代表する傑作の一つが生まれることとなった。

しかし、作品の完成を待つようにアルルに到着したゴーギャンとの夢のような共同生活は2ヶ月で破綻を迎えた。芸術に対する取り組みや個人的な資質の違いが、ゴッホの自意識の不安定さを加速し、有名な「耳切り事件」が発生する。翌年の5月から1年間、サン・レミの精神病院での入院生活のあと、パリ郊外のオーヴェルに移住し、1890年、ピストル自殺で37歳の生涯を終える。

それにしても、アルルからオーヴェルまで、晩年の2年間に、今でも強烈な光彩を放つほとんどの傑作が描かれた事実に驚かされる。「アルルの寝室」は、その時代の作品を代表するだけでなく、ゴッホの生涯の断面を象徴する重要な作品となった。

国立新美術館で開催されている「没後120年 ゴッホ展」では、「アルルの寝室」の作品を展示するばかりでなく、実物大でこの部屋を再現している。(from Shonan : Hirofumi Nakayama)



没後120年 ゴッホ展 国立新美術館 10月1日~12月20日
*5組10名様に招待券をプレゼント。
応募はがきに、〒116-0013日本郵便荒川支店私書箱22号
「ゴッホ展」earth winds係まで。
©Van Gogh Museum, Amsterdam (Vincent van Gogh Foundation)

環境アートから見るエコの叫び

エンバイロメンタル・アート (Environmental Art) 環境アートとは、室内、室外を問わずに人を取り巻く環境そのものを作品と見立てる芸術を言う。自然環境を制作素材とする作品(アースワーク)や、様々な出来事の組み合わせや、そこから考えられる相互関係とメッセージを環境アートとしても考える。近年ではエコロジーの影響で、周辺の環境との関係性を考えて設計されるランドスケープデザインの様なオブジェ自体も環境アートと呼ばれるようになってきた。あなたの身近にある環境アートを思い出してみてください。誰が、なぜそれを制作し、そこに設置したのか分かりますか?いつの間にかそこに出現して風景の一部になっている環境アートにはポジティブなメッセージがあり、世界や地球

に対する私達の視野や価値観を変えるくらいのパワーがあるのです。



- 1: 環境アート界でもっとも影響力のある20世紀のアーティストとして有名な Robert Smithson の作品。彼の代表作である Spiral Jetty (1970年) はモノユメント・アースワークとしてユタ州のソルトレイクにある。
- 2: "Earth Tears" 地球の涙 (1993年) はリサイクルボトルで制作されたサンフランシスコの環境アーティスト Marta Thoma の作品。
- 3: マイアミではオイルから島を守る為に巨大なピンク色のポリベインシートで11個の島を囲った。アイアンカーテン "Iron Curtain" と名づけられたこの環境アートは Christo と Jeanne-Claude の作品。
- 4: ロサンゼルスのリトル東京にある日米文化会館 (JACCC) の前にある石の彫刻は日系アメリカ人アーティスト、イサム・ノグチの "一世に捧げる" "To the Issei" (1980年) と題名の作品。戦前・戦中の様々な苦難と闘いながら、今日の日系人の社会的名声を築いてきた日系1世への賛辞をこめて、ロサンゼルス市からリトル東京に1983年に寄贈された。

(from Los Angeles : Romi Nakajima)

UPCYCLING アップ・サイクリング

Upcycling アップ・サイクリング (フランス語読みでは、アップ・シクリン) とは、環境保全の視点に立ったエコ製品作りのこと。リサイクルとはまた違う新しい形一つまり、Re "再生利用" ではなく Up "不要品や余剰素材を活かして" 製品を生み出すことを表す。1994年にドイツで発祥した。

今では、世界中で多くのデザイナーたちが手がけるようになってきた、この Upcycling 製品。車のタイヤはテーブルや椅子になり、ドラム缶はコーヒータブルに、ファーストフードのコーヒースプーンはシャンデリアに、ファスナーの持ち手部分はアクセサリに、缶飲料のプルトップはハンドバッグに、という具合。フランスでは、実用製品を作る専門メーカーも生まれている。

こうした製品を世界中から集めて、専門に取り扱う店 Le Troisième Élément ル・トロワズィエム・エレモンが、この6月にマルセイユに誕生した。陳列台として使われているキャストテーブルも、もとは、工事現場でよく見かけるケーブルの芯、と徹底している。

2階スペースでは、定期的にアーティストたちの作品展(販売も)が企画されていて、現在実施中なのは、STANKER スタンカー (アーティスト名: François ROYER フランソワ・ロイヤール)。対象物は、使用済みのドラム缶。こんなにモダンな椅子やテーブル、そして、ランプに生まれ変えられている。この後の個展の予定は、来年1月にパリ。フランスだけでなく、諸外国のメディアでも既に紹介されている。

(from France : Kimiko Botti)



いずれも Le Troisième Élément 店内
Le Troisième Élément : 155, rue Jean Mermoz,
13008 Marseille, France
STANKER スタンカー HP :
<http://www.stanker.fr/index.php> (英語・フランス語)